

新聞を読まない高校生にどこまで新聞が受け入れられるか 1年間の挑戦と研究報告

指定校1年次 長野県松川高等学校 若林 寿輝

1 本校の新聞活用の現状

○松川高校について

本校は下伊那郡の北端に位置し、西窓には中央アルプスの氷河地形を、東に南アルプスを一望する風光甲たる丘の上にあります。下伊那と上伊那の郡境に位置し、この地域に公立高校をという地域の願いから昭和60年4月にそれまでの私立高校を引き継ぎ開校し27年目を迎える県下で最も新しい公立高校の一つです。校訓を「創造・自律・誠実」と定め、人格の形成と知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな人材の育成を目指しています。平成15年度入学生より「総合選択型」を導入し、普通科でありながら専門科目も自由に選択でき、自分独自のカリキュラムを組み立てることができます。現在は二年次より4つのエリア[人文科学・自然科学エリア、課題探求エリア、テクノ基礎エリア、商業経済エリア]から一つを選択し、進路実現のための基盤となる教科・科目群を明らかにし、進学・就職に必要な知識、技能の習得に努めます。現在本校は総クラス数10クラス、在籍生徒数は381人となっています(平成24年度2月末)。少人数ながら生徒は、生徒会活動や部活動に積極的に参加します。今年度は本校の生徒会が中心となって、被災地に花を贈る活動がありました。被災地からいただいたペチュニアの花の種を松川高校や松川町で育て、咲いた花を被災地に贈る活動です。またボランティア部、PTA、松川町役場と連携し、被災地にボランティア活動を行ったことも記憶に新しいです。このように家庭と地域とともに歩む学校が松川高校です。

○本校での実践

生徒昇降口から教室へ向かうための階段を上ると、そこに「松川高校 知恵の杜」と称した購読中の新聞を閲覧できる棚があります。生徒の往来が最も多い場所なので、多くの生徒が新聞を手に取りやすいようにと設けたものです。棚に置いた購読新聞には全国紙や地方紙だけではなく、英字新聞やこども新聞も置き、生徒の目を引くような工夫をしました。しかしながら、開始したばかりの頃はなかなか立ち止まって新聞を手取る生徒の姿は多くありませんでした。そこで、棚の上部に新聞記事の紹介をするポスターを貼りました。すると徐々にではありますが、足を止め、ポスターを見る生徒が増えてきました。中には新聞を広げて見る生徒も少しずつ見られるようになってきました。またNIEアドバイザーの有賀先生に「棚だけではなく、新聞を閲覧できるようなスペースを設けたらどうか」とアドバイスをいただきました。依然として、新聞を手に取り、読み込む生徒の数は多くはありません。しかし、学校に当たり前のように新聞がある生活を提供することで、生徒が少しでも新聞とふれあえるように、取り組みを継続していきたいです。



次に各教科での取り組みを紹介します。

1)国語科

随時、斜面の書き取りを実施しています。活字離れが進む現代で、斜面の書き取りを通して、語彙力の増加や正しい文字を丁寧に書くことをねらいとして活動を行っています。書き取りは生徒の負担が大きく、十分な時間がないと達成できない活動であるため授業の中での両立が可能かどうか国語科では検討中です。

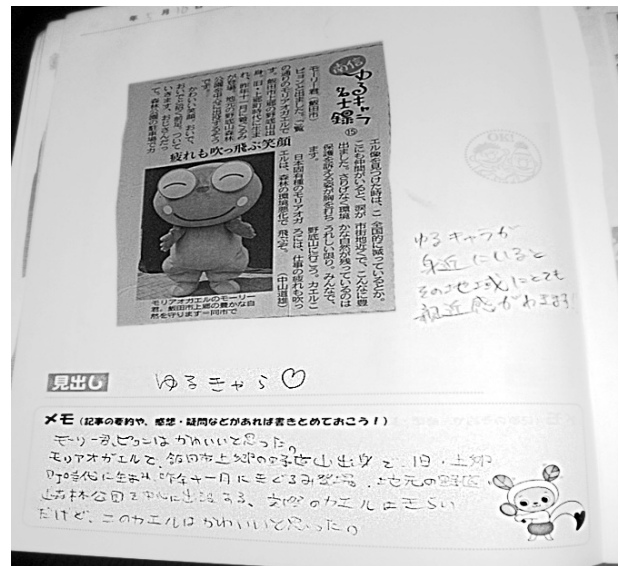
2)社会科

新聞記事のスクラップ課題を中心に、授業での新聞活用を行っています。中には1年間で信濃毎日新聞社様から頂戴したスクラップブックを1冊終わらせる生徒もいました。社会と自分をつなげることを主眼とし、活動を続けていきたいと考えています。また2012年度は社会科が研究授業を担当しました。

3)英語科

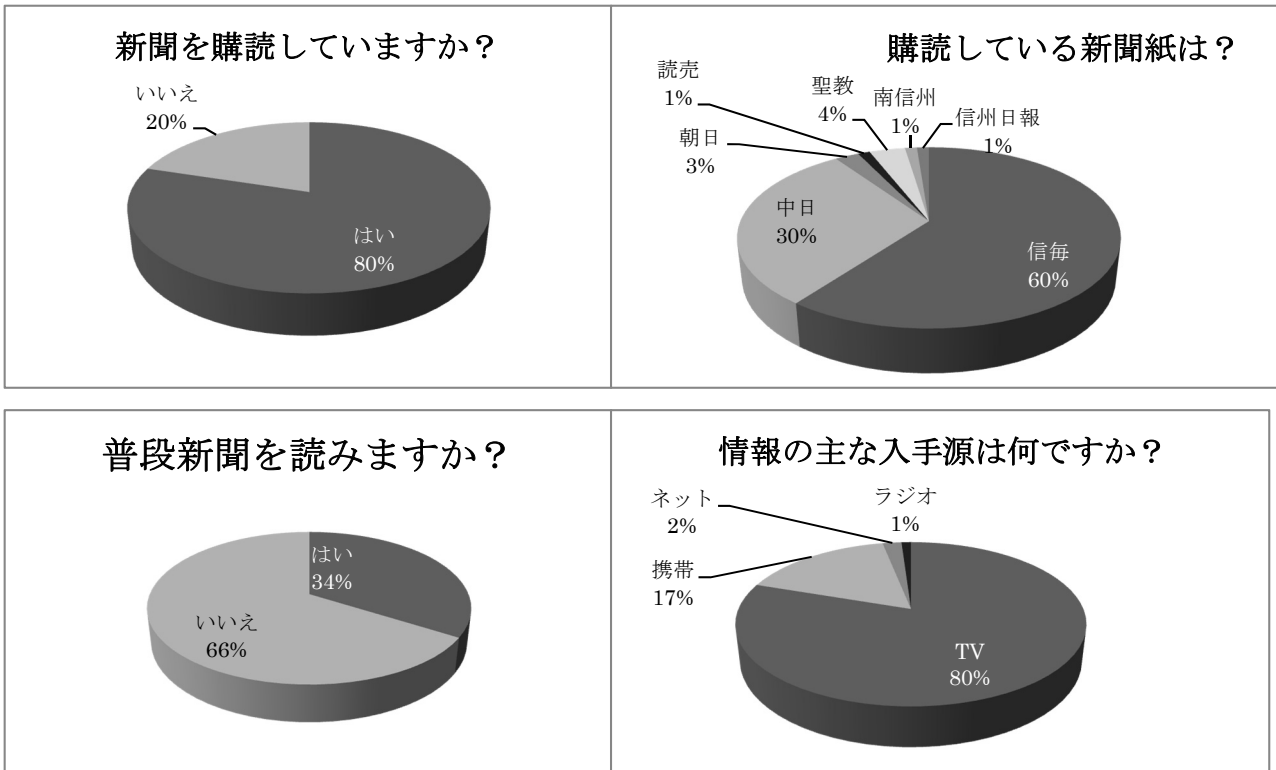
不定期に、英字新聞の見出しを訳す活動、記載されている写真から記事の内容を想像し、写真下部にある説明から記事の内容を読み解く活動を中心に行っています。しかし英字新聞の見出しは比喻表現や誇張表現を使っており、日本語訳が必ずしも英文が意図した文章になるとは限らないので、記事の精選に注意が必要であるとの意見もありました。生徒の英語力定着と社会的事象の把握の両立をめざし、今後の活用を検討しています。

その他にも家庭科や情報科など様々な教科で、学習内容に則った新聞記事を授業で活用しています。



○生徒の実態

2012年11月に1学年生徒（119名）を対象にアンケートを実施しました。



アンケート結果によると新聞を日常的に読む生徒は4割を下回ります。新聞を読む生徒に、どこを注目して見るのかと聞いてみると、大体の生徒がTVの番組表や、スポーツ面を中心に見ており、政治面や地域面を読む生徒はかなり少ないことがわかりました。習慣的に新聞を読む生徒はかなり少数派なのが松川高校の実態です。なぜ新聞を読まないのか、という質問については「読むのに時間がかかる」、「難しくてよくわからないから」、「面倒だから」、「新聞でなくても情報は手に入る」といった声がありました。中には地デジ化によって番組表を新聞で確認する必要がなくなり、新聞をとるのをやめたという生徒もいました。残念ながら、生徒の新聞に対する印象はいいとは言えない現状から、NIEの取り組みは始まりました。

2 NIE実践のねらい

○新聞について

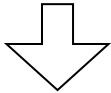
現在、情報のデジタル化は進む一方です。それと同時に情報媒体のマルチメディア化も進展し、音・映像・文章を同時に受け取ることが可能になっています。スマートフォンの普及はその一端であると考えられます。現在、松川高校生の多くがスマートフォンを利用しており、生徒は莫大な情報を入手可能な状況です。またデジタル化によってTVを通していつでも番組表や天気予報を知ることできるようになりました。情報化社会となった今、新聞の果たす役割が問われていると感じます。

今回の実践では新聞を「生徒と社会をつなげる存在」として考えました。スマートフォンやインターネット端末によっても生徒は社会とつながることが充分可能ではありません。しかし新聞の持つ教育効果を信じ、新聞に社会の扉役を担ってもらうことにしました。

○新聞活用のねらい

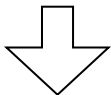
松川高校生が新聞と出会う

本年度の活動のスタート地点です。食わず嫌いで新聞を拒絶していた生徒に、新聞との出会いの場を提供します。如何に生徒の心の壁を取り除くかが重要です。きっかけとして**新聞クイズやまめ知識コラムの活用**など生徒が親しみやすいような内容から始めました。また教員側が新聞記事を選ぶのではなく、生徒同士で選ぶ活動なども取り入れることで、一方的なやりとりにならないように気をつけました。



新聞に対する興味・関心を高める

新聞と出会った生徒は、実際に新聞とふれ合います。身近な地域の記事や、国内外の記事と幅広くふれ合い、新聞を通して社会を学ぶことができるようになります。授業で学んだことが新聞に載っていることや、今までわからなかったニュースがわかるようになったことから成功体験を積み重ねます。この成功体験が新聞と生徒の距離をさらに近づかせると考えます。それから新聞をきっかけに生徒の世界が広がるように支援を続けます。生徒に「新聞って役に立つんだ」と感じてもらえるように仕掛けていきます。



新聞の味わい方を身につける

生徒は新聞とふれ合う活動の中で様々な知識を手に入れます。また社説や論評を通して他者の考えを知り、自分の意見に反映することもできます。記事の内容を学ぶだけでなく、文章を要約する技術、社説を考察する能力など様々な味わい方を学びます。それにはもちろん、**基礎的な語彙力や読解力、社会的背景の理解**などが必要になります。そういった基盤となる力の育成も新聞を通して手に入れることができると考えています。

*本年度は研究指定校1年目ということと、松川高校生の実態をふまえた上でねらいを設定しました。

3 研究の概要

○研究授業

対象：1年「現代社会」

単元：基本的人権の保障と新しい人権の保障

新聞の活用方法：教科書や資料集を補う教材に（新聞で学ぶ）

前時の授業では大津でのいじめ事件の内容を追跡した記事を読み深め、いじめが奪うものをクラス全体で考えました。本時ではいじめを許さない姿勢、基本的人権を守る姿勢を養うことを目的としています。利用した新聞はいじめに対して、各界の著名人がメッセージを寄せた記事です。メッセージの中から筆者が最も伝えたい文章をグループで考える作業を行います。その活動を通して、自身がいじめ問題に対してどのようなことができるか考え、人権尊重について主体的に考えることができるようになることを本時の目的としています。

	学習活動	教師の支援	指導上留意点
導入	●いじめが奪うもの（前時の学習問題）を確認し、本時ではいじめを無くすために自分に何ができるか考えることを伝える。	○前時に生徒が考えたいじめが奪うものを模造紙にまとめ、一覧できるようにする。いじめの非情さを感じられるよう支援する。	①生徒の中にはかつていじめに関わっていた生徒がいるため、発言には注意が必要であり、教師の主観でいじめを無くすためにどのようなことが必要であるか語ることをせず、生徒自身の考えを尊重する。
展開	●各自いじめに対するメッセージが書かれた記事を黙読し、記事の中から筆者がもっとも伝えたい言葉を探す。 ●グループ内でそれぞれが選んだ言葉を発表し合い、話し合いを通して、筆者のもっとも伝えたいメッセージを一つに絞る。 ●画用紙にグループで選んだ言葉を書く。また画用紙には、記事文を読んだ感想、自分がいじめを無くすために何ができるか、いじめに関わる人に対してどんなメッセージをおくりたいかなど書いた用紙も貼り付ける。	○クラスを8グループに分け、それぞれのグループに違った記事を配布する。授業終盤の意見共有の際、多様な意見を知りきっかけとする。 ○メッセージの抜き出しの際には、記事の大部分を占めている文章に関連する言葉が伝えたい言葉に繋がる可能性や、自分がいじめに関わっていたとしたらどんな言葉をかけて欲しいかなど、抜き出しに迷う生徒への助言を行う。	②生徒の理解を深めるためにも、生徒が出した答えの背景にある生徒の考えを引き出せるように、個々の生徒に問い返しを行う。 ③生徒が、今、何を考え、何をすべきなのかがわかるように板書や教材に工夫をする。
まとめ	●黒板に完成した画用紙をグループ分貼り付け、クラス全体で意見を共有する。	○黒板に各グループの画用紙を掲示することで、クラス全体で意見を共有できるようにする。また記事によっては異なった意見を言っている場合もあり、多様な考え方が社会に存在することを感ずることができるよう支援する。	

○新聞利用の際に特に工夫したこと。

前述したように、本校生徒は新聞に対して拒絶的な態度をとる生徒が多いです。そういった現状の中で、如何に生徒と新聞の距離を近づけるか常に考え、新聞を活用しました。本年度の実践例を次に紹介します。

①新鮮な新聞記事を扱うこと

新聞は読まずとも、朝の時間にニュースを見てくる生徒は多いです。そのため、できるだけ授業日の新聞記事から関心を持ちそうなものを選び、生徒に配布しました。北朝鮮のミサイル発射のニュースが流れた日には、日米安保条約と核の傘の関係についての記事を生徒に配布しました。なかなか授業では生徒の実感や興味・関心を得にくいテーマも、**新鮮さ**を加えることで、生徒の身近な話題にスッとおちていく効果が期待できます。

②新聞クイズの実施

「503 万円…この数字は何の数字でしょう？」松川高校の知恵の杜で掲示している新聞記事ポスターにつけた見出しです。本文を読めば、クイズの答えがわかるようになる仕組みです。本屋のポップなどを参考に、生徒が立ち止まり、新聞を読みたくなるような記事ポスターの作成をつづけました。授業の中でも手軽に実践できるため、比較的生徒も取り組みやすそうな印象を受けました。

③生徒に身近な問題であること。

携帯電話をめぐるトラブルや、家族の問題など、新聞には社会で関心の高い項目について、スポットライトを当てた記事が多く存在します。そういった記事もなるべく授業内、学級活動で活用します。

④ワークシートの作成

新聞記事を切り抜き、問題文や考察点を書き込んだものを一枚の問題用紙として配布しました。実践開始当初は、どこをみればどんなことが書いてあるかわかるように、記事に線をひいたり、難しい語句には説明をつけたりしました。初年度は答えを誘導できるワークシートにしましたが、次年度以降は少しずつ形を変えて行きたいと思います。(**答えの誘導を行うと生徒自身の観点や考えを奪うことになってしまう可能性がある。**)

4 研究のまとめ

今年度の実践にあたり、校内校外問わず、多くの先生にご助言頂きました。そこで多くの先生から「教師が楽しいと思わないものは、生徒も楽しく思わないよ」との言葉を頂戴しました。本校生徒の実態にあわせて、どうしたら生徒が新聞を楽しそうに手に取ってくれるか、生徒が新聞を楽しそうに読む姿を思い浮かべて、教材研究にあたりました。はじめは、どうしても堅苦しく考えてしまい、新聞活用はこうでなくてはならないというステレオタイプにとらわれてしまっていたと思います。しかし、N I Eセミナーで知った他校の実践を少しずつ取り入れていくことで、少しずつ教員の感覚も生徒の感覚も変わっていったと思います。N I Eの実践の上で、校種を問わず研究会などでの意見交換は欠かせないものだと感じました。今年度は南信地区・全県・全国と様々なN I Eの研究会に参加しましたが、どれも非常に価値があるものでした。是非こういった機会を教員だけでなく多くの人に提供して頂きたいと思います。

今年度の最後に生徒に再びアンケートをとりました。社会科が隔週で行った新聞の切り抜き課題についての印象をきくアンケートです。多くの生徒が「大変だった」「めんどろだった」と感想を書きました。しかしその言葉の次に「でも普段読まない新聞を読んで楽しかった」といった意見を書く生徒がとても多く、うれしい気持ちになりました。次にアンケートにあった生徒の言葉をいくつか紹介します。

課題の時に書きやすい記事を選ぼうと思って、記事をどんどんめくっていくと普通に新聞を読んでいます。新聞を読んで知ってるニュースや出来事が増えた/文章を最後までしっかり読むことの大切さがわかった/文章力がついた気がする/みんなで同じ記事を考えて時、いろんな意見を比べたりできるからいい/読むのが難しくってめんどくさかった/新聞を読む意味があったのかよくわからなかった/家で新聞をとってないから大変だった/新聞を読むこつがわかった気がする/新聞の課題をとおして言葉の使い方が変わった。

これらの意見が今年度の実践を象徴しているように、ねらいの「興味・関心を高める」段階までは多くの生徒が到達できたのではないかと感じます。しかしその次のステップである「味わい方を身につける」段階まで到達できた生徒はそう多くはないです。次年度は味わい方を身につけるための新聞活用と、依然として苦手意識を持っている生徒をどこまで伸ばしてあげられるかを根幹に置き、新たな実践を行っていきたいと思います。

5 残された課題

○ファミリーフォーカス

第17回NIE全国大会（福井）では家庭でのNIEの重要性が提言されました。今後は学校内での新聞活用だけでなく、家庭との連携も考えて行かなければいけないと感じます。生徒の記事感想に保護者がコメントをつけてもらう活動や保護者の方が選んだ記事について生徒が考えてみる活動などが実践例としてあげられます。高校生という多感な時期なので、可能かどうかは不明ですが、無理のない範囲で、家庭・生徒・学校が繋がってNIEの実践を続けていけたら素晴らしいと思います。

○「新聞」は高校生に受け入れられるか

教員にとっての新聞と生徒にとっての新聞には大きな意識の差があると感じます。教員は「教材」として、生徒は「メディア」として扱っています。ここで考えなくてはならないのは、この教員と生徒の意識の差をどう埋めるかです。生徒の多くはスマートフォンを持ち、常に知りたいことは検索できる状況にあります。その中で、新聞とスマートフォン（インターネット端末）を比較した時に、生徒はスマートフォンに有用性を感じています。様々なメディアの中で、新聞が持つ長所は何か。この点を明らかにし、生徒に理解してもらうことがNIE実践の上でとても大切だと感じます。今年度、生徒に伝えた新聞活用の意義を簡単にまとめたものが次の表です。

1 社会の“今”がわかる。	}	インターネット端末との大きな違いは4だと思います。ネット検索は気になるワードのみを洗い出します。しかし新聞は気になる記事を探す過程にも様々な記事との出会いがあります。この出会いの多さが魅力の1つではないでしょうか。
2 学習内容を深めることができる。		
3 記事（主張）の比較ができる。		
4 多種多様な情報へアクセスしやすい。		
5 語彙力・読解力を身につけられる。		

新聞を拒絶していた生徒にどこまで、新聞が受け入れられるか。これはNIE実践でもあり、挑戦でもあります。変わりゆく現代社会。その中で、学校において新聞の新しい活用方法を見いだせるよう、研究を続けていきたいと思います。